

胃癌に重複した胆嚢腺腫内癌の1例

岐阜大学第1外科, 同臨床検査医学*

尾関 豊 林 勝知 堀谷 喜公
鬼束 惇義 後藤 明彦 下川 邦泰*

A CASE OF CANCER IN ADENOMA OF THE GALLBLADDER IN A PATIENT WITH GASTRIC CANCER

Yutaka OZEKI, Masatomo HAYASHI, Yoshihiro HORIYA,
Atsuyoshi ONITSUKA, Akihiko GOTO and Kuniyasu SHIMOKAWA*

1st Department of Surgery and Department of Laboratory Medicine*,
Gifu University School of Medicine

索引用語: 胆嚢腺腫内癌, 胆嚢内隆起性病変, 胃・胆嚢重複癌

はじめに

超音波検査(以下US)の発達・普及により胆嚢内隆起性病変の描出が容易となった。しかし、その質的診断はなお困難で、治療方針にも統一した見解がない。最近われわれは、胃癌の術前検査として施行したUSにて胆嚢内隆起性病変を発見し、病理組織学的に腺腫内癌と診断した症例を経験したので報告する。

症 例

症例: 69歳, 男。

主訴: 心窩部痛。

家族歴: 特記すべきことはない。

既往歴: 52歳時に気管支拡張症, 62歳時に胃潰瘍。

現病歴: 約2カ月前より心窩部痛が生じた。他院にて精査の結果, 胃癌と診断され当科へ紹介された。

現症: 体格・栄養中等度。結膜に貧血・黄疸を認めず, 胸部および腹部に異常所見を認めなかった。

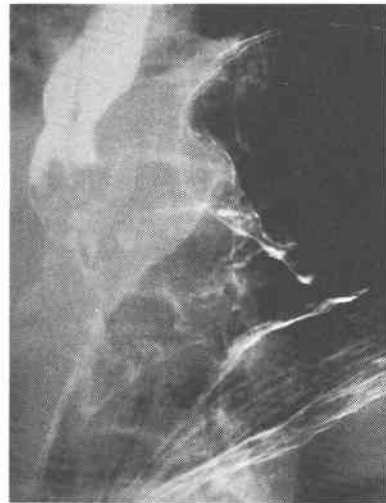
入院時検査所見: 尿および血液一般検査には異常を認めなかった。

胃X線検査所見: 噴門部に不整形の潰瘍形成を認めた(図1)。

胃内視鏡検査所見: 噴門部に Borrmann 3型の浅い潰瘍形成を認め, 生検にて低分化型腺癌であった。

US所見: 胆嚢体部腹腔側に14×11mm大の音響陰影を伴わない, 内部エコー不均一なポリープ様病変を認めた(図2)。また, ポリープ様病変とは別に4mm前

図1 胃X線像: 噴門部に不整形の潰瘍形成を認める。



後の音響陰影を伴う strong echo を2個胆嚢内に認めた。

Computed tomography (CT)所見: 胆嚢内に14mm大の濃淡不均一な隆起性病変を認めた(図3)。

以上より, 胃癌, 胆石, および胆嚢癌の疑いにて手術を施行した。

手術所見: 胃噴門部から体上部後壁にかけて明らかに漿膜に浸潤した腫瘤を認めた。胆嚢は体部に小指頭大の腫瘤を触知するのみであった。胃全摘術および胆嚢摘出術を施行した。

<1986年4月9日受理>別刷請求先: 尾関 豊
〒500 岐阜市司町40 岐阜大学医学部第1外科

図2 US：胆嚢体部にポリープ様病変を認める（矢印）。

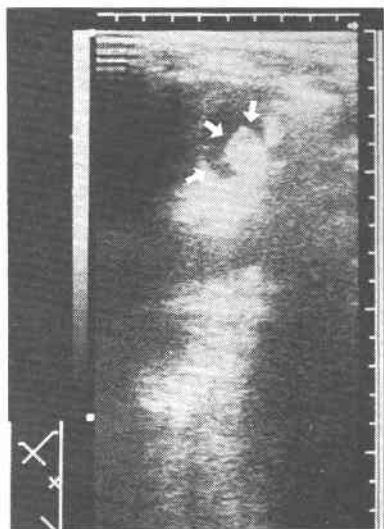


図3 CT：胆嚢体部に隆起性病変を認める（矢印）。

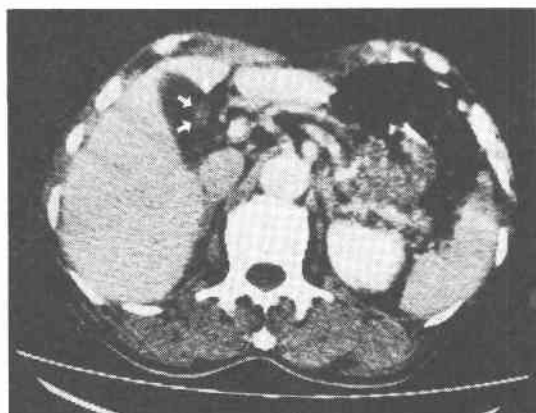


図4 切除胃標本：噴門部後壁に Borrmann 3 型胃癌を認める（矢印）。

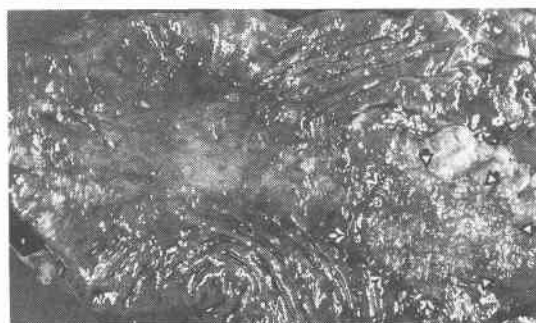


図5 切除胆嚢標本：体部に有茎性ポリープを認め（矢印），その他に2個の結石を認める。

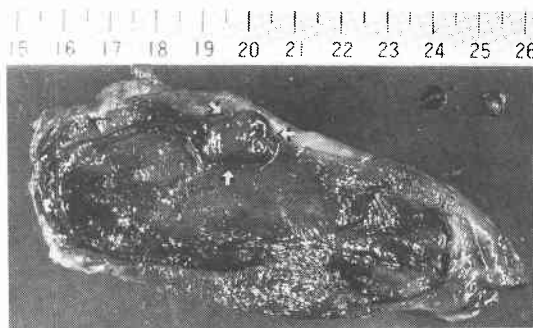
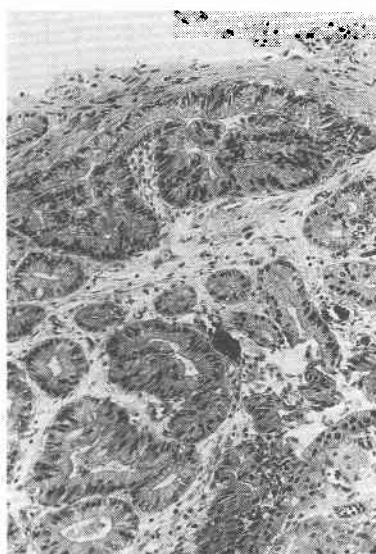


図6 胃病理組織像：高分化型管状腺癌を認める。



摘出標本所見：胃噴門部から後壁にかけて辺縁がわずかに隆起した7×6cmの Borrmann 3 型胃癌を認めた（図4）。 $P_0H_0N_1 (+)S_2$, Stage III. 胆嚢体部腹腔側前壁に14×11×7mmの有茎性ポリープを認め、表面には粗大な凹凸があるが比較的平滑であった（図5）。また、5mm大の結石を2個認めた。

病理組織学的検査所見：切除標本の胃の組織診断は高分化型管状腺癌であった（図6）。胆嚢ポリープの大部分は管状腺腫であったが、数カ所で高分化型管状腺癌の部位を認め、腺腫内癌と診断した（図7）。

術後経過は良好で第47病日に退院し、術後2年10カ月の現在健在である。

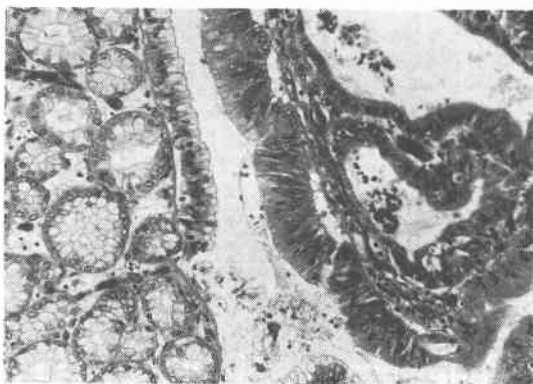
考 察

USが胆嚢をはじめとする肝胆道系のスクリーニン

図7 a 胆嚢ポリープのルーペ像



図7 b 胆嚢病理組織像：左側に管状腺腫，右側に高分化型管状腺癌を認める。



グに使用されるようになり被検者の約2%に胆嚢内隆起性病変が発見されるようになった^{1,2)}。これら胆嚢内隆起性病変の質的診断は、その大きさ、茎の有無および表面性状の組合せでかなり可能であるが³⁾、鑑別困難なものも多く隆起型胆嚢癌、とくに早期胆嚢癌との鑑別が問題となる¹⁴⁾。

富士ら⁵⁾の集計によれば、早期胆嚢癌のほとんどが隆起型であり、本例も同じく隆起型であった。一方、病理側からの報告では早期胆嚢癌に占める表面型の頻度が高く、渡辺ら⁶⁾は早期胆嚢癌39病変中29病変74.4%、武藤ら⁷⁾は14例中11例78.6%が表面型であったと述べている。これら病理側からの報告は、摘出胆嚢を全割して詳細に検索した結果であり、臨床側からの報告例は術前診断のつきやすい隆起型が優位に選択された可能性がある⁶⁾。しかし、表面型早期胆嚢癌の術

前診断は現時点では不可能と言わざるをえず⁸⁾、術前に評価可能な点で隆起型早期胆嚢癌が重要と考えられる。

内村ら⁹⁾は組織学的診断の確定した最大径20mm以下の胆嚢隆起性病変503例を集計している。これによると、隆起性病変中に癌の占める割合は、5mm以下で4.6%、6~10mm 9.3%、11~15mm 24.1%、16~20mm 61.3%で、病変が大きくなるにつれて癌の頻度が増えており、一般に手術適応とされている10mm以上^{10,11)}でとくにその傾向が強い。しかし、10mm以下でも癌の比率がかなりあり、また癌症例は各大きさにほぼ均等に分散しているのに対し、他疾患では小さいものが多いため相対的に大きい病変で癌の比率が高くなっているにすぎない。したがって、10mm以下の病変をどうするかが問題であり、内視鏡的なアプローチも開発されているが²⁾、現時点では一般的ではなく、それぞれの施設で治療方針が異なっているのが現状である⁴⁾¹⁰⁾¹¹⁾。本例の胆嚢内隆起性病変は最大径14mmであり、大きさだけから手術適応としてよいが、かりに5mm以下の大きさであっても開腹術を前提として発見された場合は、積極的に胆嚢摘出術を施行すべきと考えられる。

本例の胆嚢内隆起性病変は組織学的に腺腫内癌であった。胆嚢腺腫の癌化率は6~15%¹²⁾¹³⁾とされているが、腺腫と癌との関連はいまだ十分には解明されていない⁴⁾。しかし、本例のような有茎性の粘膜癌の多くが腺腫成分を有しているとされ、胆嚢癌の組織発生を考える上で興味深い⁴⁾⁶⁾。

胃癌と胆嚢癌の重複癌は、全国胃癌登録による胃・他臓器重複癌965例のうち40例4.8%と比較的少ない¹⁴⁾。早期胆嚢癌と胃癌の重複癌は谷村ら¹⁵⁾の報告が第1例であり、その後数例が報告されているのみで⁵⁾¹⁴⁾、術前に早期胆嚢癌を指摘できたのは本例が最初と思われる。

おわりに

胃癌の術前USにて発見された胆嚢腺腫内癌の1例を報告するとともに、若干の文献的考察を加えた。

稲田 潔教授の御指導・御校閲に深謝します。

文 献

- 1) 須山正文, 有山 襄, 島口晴耕ほか: 胆のう隆起性病変に対する診断の進め方. 腹部画像診断 5: 423-428, 1985
- 2) 市川和男, 中澤三郎, 内藤靖夫ほか: 経皮経肝胆のう鏡検査 (PTCCS) および経皮経肝胆のう二重造影検査 (PTDCC) による胆のう隆起性病変の診断.

- 腹部画像診断 5:459-473, 1985
- 3) 佐藤博道, 松浦秀和, 田原昌人ほか: 胆嚢微小隆起性病変の種類と鑑別—粘膜癌および各種隆起性病変の病理学的検討. 胆と膵 6:895-901, 1985
 - 4) 伊関丈治, 牛山孝樹, 別府倫兄ほか: 胆嚢ポリープの臨床と病理. 日外会誌 83:1429-1436, 1982
 - 5) 富士 匡, 河村 奨, 清水道彦ほか: 早期胆嚢癌3症例の診断課程と本邦報告例による m 癌と pm 癌の対比. 胆と膵 1:1057-1063, 1980
 - 6) 渡辺英伸, 白井良夫, 鬼島 寛ほか: 胆嚢癌の病理—早期胆嚢癌の肉眼的特徴と検索法—. 肝胆膵 10:527-534, 1985
 - 7) 武藤良弘, 内村正幸, 岡本一也: 胆嚢早期癌と境界病変. 肝胆膵 10:535-541, 1985
 - 8) 白井良夫, 渡辺英伸, 鬼島 宏ほか: 早期胆嚢癌の肉眼形態と画像診断. 胆と膵 6:503-512, 1985
 - 9) 内村正幸, 脇 慎治, 木田栄郎ほか: 胆道造影(DIC, ERC)による胆のう隆起性病変の診断. 腹部画像診断 5:437-443, 1985
 - 10) 高木一郎, 山秋拓司, 柴田耕司ほか: 胆嚢小隆起病変の手術適応—内科側から. 胆と膵 6:868-869, 1985
 - 11) 古賀明俊, 渡辺清朗, 中山文夫: 胆嚢ポリープ様病変の治療. 外科 45:1515-1519, 1983
 - 12) Christensen AH, Ishak KG: Benign tumors and pseudotumors of the gallbladder-report of 180 cases. Arch Pathol 90:423-432, 1970
 - 13) 荒木 攻, 田原栄一: 胆嚢における乳頭状腺腫に発生した早期癌の1自験例—本邦における胆嚢良性腫瘍の統計的観察—. 癌の臨 21:220-229, 1975
 - 14) 大久保智佐嘉, 金子洋一, 野村秀洋ほか: 胆嚢粘膜癌と胃癌の同時性重複癌の1例. 外科診療 26:107-110, 1984
 - 15) 谷村 晃, 西村祥三, 柴田英徳ほか: 早期胆嚢癌・早期胃癌の重複例. 癌の臨 21:939-944, 1975